

キリスト教の女性観——その虚像と実像

岡野治子

※本稿は2015年10月13日、東洋哲学研究所の研究員・委嘱研究員を対象に行われた「社会と宗教」研究会での講演をまとめたものです。

1 はじめに 仏教との比較を通して

皆さまは仏教に造詣が深くていらっしゃると思います。ここではじめに、仏教とキリスト教の類似点、相違点を、テーマに沿った視点から大雑把に押さえておきたいと思います。仏教の女性観、キリスト教の女性観、その他にも各宗教史においても、独自の「女性イメージ」

が形成されてきました。その結果それぞれの歴史において、女性はそのイメージに規定され、またそれにふさわしい生き方が期待され、自らもそれを内面化してきたのです。つまり女性の生き方は「他律的」だった、というわけです。無論、同じようなことは男性についてもあてはまらないわけではありません。ただ女性に關しては、多くの場合、良き母、よき妻というステータスに限定されてきた、という点で、大きな問題があります。近・現代のフェミニズム思想と運動の台頭は、こうした性役割の固定化に対する異議申し立てが背景

にあります。当然ながら男性と同じような能力、願望をもち、男性に特化された社会的役割を担いたい女性が過去にも存在したからです。他方、そうした葛藤があったからこそ、女性は自分自身の能力、希望、喜びと苦しみの諸体験を深化させ、内的なエネルギーを蓄積してきました。こうした負の体験が結晶したメッセージこそが、現代の女性にとって説得力がある、という側面もあると思います。

まず、仏教とキリスト教の違いですが、無論、内容的相違も大きいのですが、ここでは教え・教義の展開の仕方、つまり教え・教義が人々の日常生活を統制する仕方が異なることを確認しましょう。プロテスタント教会の場合には、統一された総本山的な中央統一機関がありませんので少し事情が違います。カトリック教会や東方教会、聖公会の場合は、やはり総本山ともいふべき中央統制機関によって、「聖書」の解釈、一人ひとりの信者の生き方、価値観、モラルといったものが中央集権的に規定されてきました。これがキリスト教の特徴です。諸宗派に分岐しているため、プロテ

スタントは少し事情が違ふと申し上げましたが、現実には日本も含めてプロテスタント教会もそれなりに統一した機関をもっています。従っていわば中央集権的に、「こう理解すべきである」というメッセージが絶えず信徒に発信されているというのが、キリスト教世界です。

それに比べ仏教の場合には、それぞれ宗派があるとしても、經典の読み方とか生き方の問題で、統一見解、「こう理解すべき」というメッセージの発信と拘束力が、それほど強くないと思われます。すなわち自由度が高いと言えます。このところが、キリスト教と非常に違うのです。この視点を確認することで、今日のテーマの鍵である「女性イメージ」が可視的になるはずで、す。キリスト教会は、常に「女性はこうあるべき」という形で、規範的メッセージを送ってきました。そのため日常、女性たちが不自由を感じたり、抑圧を強く感じるものがあつた、という事情があります。そもそもフェミニズムが、キリスト教文化圏の中から台頭してきた事実は、そのことと無関係ではないでしょう。

仏教の女性観に目を転じますと、キリスト教の女性観と酷似しているところもあります。すなわち女性性と言いますか、女性の性そのものが悪魔のように怖れられたという点です。「外面げめん如菩薩、内心うちしん如夜叉やしや」という言葉がありますが、女性は菩薩のような美しい外面にもかかわらず、心の中に夜叉のような激しい衝動を秘めているというイメージです。キリスト教圏のフェミニストたちが、「セクシュアリティの悪魔化」と呼ぶ現象とも関わることでしょう。女性に対する非常にネガティブな表現が、セクシュアリティの負のイメージと相まって、仏教にもキリスト教にひけを取らないほど多く存在します。悪魔として捉えられたセクシュアリティのイメージが、キリスト教と仏教には共通して、女性という存在に投影されているのです。さらにキリスト教・ユダヤ教にもまた仏教にも共通して、血の穢れという觀念が女性のダメージに拍車をかけます。このように共通項としての女性のダメージを踏まえることで、キリスト教の女性観が理解しやすくなると思います。

「神の似像にすがた」としての「自由で尊厳ある人間」

キリスト教と仏教、特に原始仏教を比べると、人間観の相違に気づきます。「人間とは何か？」への応答が根本的に違っているのです。それは、「旧約聖書（ヘブライ語聖書）」というユダヤ人本来の伝統において語られる人間の誕生物語を読むとはつきりすることです。人間は、唯一神の手によって、とりたてて価値のない「土」という素材から創造され、神が息を吹き入れることで、生ける存在となった、とあります。神と人間は、創造主と被造物という関係が前面に出ているせいで、絶対に一致することのない平行線上の存在という理解から出発します。人間が五蘊ごうんの集合体であるという初期仏教の考え方や、すべての衆生には仏性があるという大乘仏教の考え方とも、一線を画す人間観です。キリスト教の人間観の特徴は、神がどのように人間を造られたか、という語りに表れています。すなわち神は、自分の像かたちに似せてひとを造った、という表現です。そこから、「神の似像としての人間」は、神ほど完全ではないけれども、似像として自由を有し、自律性をもつ

ている。従って尊厳と人権の備わった存在であるという理解です。「自由」「自律性」「尊厳」「人権」がキリスト教の人間観の基礎になっているということです。欧米で醸成された生命倫理においては、人間の尊厳、そして人権が、どのようなケースであれもつとも優先されます。先端医療の臨床でも「人権」「尊厳」がキーワードになっています。

信仰で結ばれた「霊的家族」

キリスト教の人間観を表すもうひとつのキーワードは「関係性」です。これは仏教でも大切にされることです。人間は本来孤独に耐えがたい存在であるからこそ、家族を含めていろいろなかたちで、他の人間、種々の生物、あるいは諸環境との共生という関係性を大事にしよう、というメッセージは、宗教にはかなり普遍的に見られます。

「キリスト教的理想の人間像」を敢えて考えてみますと、この絵（図1）がそれを暗示していると言えます。1500年代に描かれた「聖一族」という絵画です。中

央に、マリア、マリアの膝に抱かれる幼児イエス、イエスを挟むようにマリアの母であるアンナが寄り添っています。これは「女性の三位一体」とも言われる三者の群像ですが、これを取り囲むように聖人の諸家族の姿が描写されています。これらの家族はそれぞれ霊的につながった大きな家族を形成していると考えられています。

このようにイエス・キリストを通して神への信仰を告白する人々すべてが「霊的家族」を形成しているのです。家族といっても、血縁的紐帯^{ちゆうたい}だけを意味するのではなく、個々の人間は自律し、自由であるけれど、このような形で信仰を共にする人々がひとつの家族を形成するというイメージが、キリスト教の伝統にはあります。霊的家族のようなイメージが、仏教にあるのかどうか、皆様におうかがいしたいところですが、キリスト教理解のために、このイメージを心にとめていただきたいと思います。個々が自律していながら、こまやかな感情に溢れ、他者を気づかうという、そういう理想の人間たちが理想の家族を形成するとい

図1 聖一族のマイスター作「聖一族祭壇」中央パネル
(1503頃、ケルンのヴァルーフ・リヒャルト美術館所蔵)



うイメージが、この図像の中に盛り込まれています。

キリスト教における女性の三原型

キリスト教の女性像には大まかに分けて、三つの原型があります。

第一の原型は、「聖なる女性」です。典型的な例は聖母マリア、マグダラのマリアのように聖人とされる女性です。このタイプの女性たちの必要条件是、信仰が深いこと。第二条件はセクシュアルな影が非常に薄いということです。不特定多数の男性と愛を交わすという娼婦イメージとは対照的です。聖母マリアに冠せられている処女懐胎、永遠の処女という一見矛盾する教義成立の背景には、こうした思考が潜んでいると思われます。

第二の原型は魔女です。聖女とは対極に位置していて、性的に放埒であり、しかも信仰心のうすい女性のタイプが、「魔女」と呼ばれました。ドイツを中心に、ヨーロッパでは魔女裁判が19世紀まで行われました。魔女とされた人々は、教会に通わないなど信仰心がう

すいか、複数の男性と性的関係をもつなど貞節を守らない、と見なされた女性たちでした。このように「セクシュアリティの影」と信仰心の有無が、女性の善悪を決定する基準になっていたのです。私は、1960年代から10年余り学業のためにドイツに滞在したのですが、非常に驚くことがありました。それは、誰かが口紅をつけているのを目撃すると、「あら、あなたもエヴァ（イヴ）の娘ね!」と言って、からかうのです。現代ヨーロッパでも、おしゃれをし、おしゃべりをする女性には、エヴァとの連想でこうしたコメントが献呈されたりするのです。

第三の原型は、いわば普通一般の女性たちです。聖女も魔女も、基本的にはフィクションナル存在ですが、このタイプの普通の女性たちとは、信仰深く、良い妻であり、良い母である、いわゆる「良妻賢母」です。このような女性たちが、教会の推奨する日常生活を担う存在というわけです。この第三の女性像に関しては、ドイツでは「三つのK」という条件をつけて理想が語られました。日本でかつて人口に膾炙した三K（三高）

とは男性の理想的条件だったようですが、ドイツで言う「三つのK」は、まずキルヒエ（Kirche）―教会、続いてキンダー（Kinder）―子ども、そしてキュツヒエ（Kuche）―台所を大切にするという生活の三本柱です。この三Kを日常的に生きることが、教会の提唱する女性の理想像だったのです。

こうしたイメージの成立には、キリスト教の「旧約聖書」「新約聖書」だけではなく、ユダヤ人の伝統やギリシア・ローマの古代伝統も関わっています。さらにゲルマン人、ケルト人らの民族宗教が現実の西ヨーロッパ文化を形成していることも忘れてはなりません。形成されるイメージとは、複合的文化の結晶です。キリスト教文化圏の女性観には、多様な文化伝統が交差していることを頭の隅に入れておきたいと思います。

2 「旧約聖書」の女性創造物語

続いて聖書に描かれる女性像を考えましょう。聖書に淡々と描かれている当時の女性たちの行動を通して、「実像」はどんなものだったのか、生活を担うありのま

まの女性の姿を探りたいと思います。イエスの死後、「キリストの体」と自己定義する教会が組織され、さらに徐々にイエスの教えを整理し、神学を形成することになります。女性像も、こうした教会神学というプリズムを通して形成されていくのです。神学の担い手は、男性聖職者ですから、現実にはありえない理想の女性像を一方的につくり上げていった事実も無視するわけにいきません。たとえば、現実の女性にとって「処女であり、母である」ことはフィジカルに不可能なのですが、教義上の理想の女性像に照らしながら、現身の女性の生き方が規定されていきます。女性キリスト者にとって、中世以来、近代・現代でもまだ生きにくさがあるとすれば、それは、教会によってつくられたこの虚像の女性イメージが影響しているのでしょうか。1980年代以後、欧米中心に展開したフェミニスト神学、いわば一種の解放の神学は、女性キリスト者の生きにくさの原点を検証することで始まりました。

そうした生きにくさは、「旧約聖書」で語られる人類創造物語の偏った解釈と関係があるのです。「旧約聖書」

はヘブライ人、つまりユダヤ人の歴史と宗教的な世界を描いたものとして知られています。キリスト教会でも、「旧約聖書」は教義の柱のひとつに位置付けられています。「キリスト教らしい」メッセー지가結晶しているのは、言うまでもなく「新約聖書」ですが、それを理解するには「旧約聖書」という前提を知らなくてはなりません。「旧約聖書」と「新約聖書」は、決して相互に矛盾したり、また一方が他方を超えるという類の関係にあるものではありません。イエス・キリストは「旧約聖書」における神のメッセー지를彼なりの方法で実現したいと願ったにもかかわらず、ユダヤの伝統的な人々とは、その世界理解、神理解、律法理解において、相容れない部分が生じてしまったのでした。イエスが十字架の刑に処せられる結果になったのは、ローマ人が関わったからというよりも、ユダヤ人の正統派の人々との理解の齟齬、対立が大きかった、と考えられます。モーセが神から授かった律法をどのように遵守するか、実現するかという点で、方法に関して相違があったのです。キリスト教的観点からすると、イエスが神を「愛」

と規定したことで、ユダヤ人の正統派とは異なり、非常にリベラルなたちで律法を実現しようとしたのです。結果としてユダヤ教とたもとを分かつことになり、キリスト教が自立し、確立していったのです。

では旧約聖書の女性創造物語に目を向けましょう。素朴な創造物語が、神学のまなざしをくぐることで、独特な女性像が形成されることになるのです。「母性」が賛美されるとともに、女性の小悪魔的イメージも付着してきます。

二通りに記述された「女性の創造」

聖書によれば、人祖はアダムとエヴァです。これは神によって直接創造された人類の男性と女性を意味します。ここで問題になるのは、素朴なエヴァ像から、徐々に分裂した女性像が引き出されたことです。

よく誤解されるのですが、アダムというのは男性個人の名前ではありません。ヘブライ語で「土」のことを「アダム」と言い、「土から造られし人類」というのが「アダム」の本来の意味です。「旧約聖書」でも非常

に注意深く、アダムのことを最初は「男」と呼ばずに「人」と呼んでいます。

そして、女性の創造物語が、旧約聖書の「創世記」に二回登場するのをご存じだと思います。1章の27節には「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」（新共同訳、以下同じ）とあります。明瞭に男女が同時に創造されたことが語られています。しかしもう少し先を読んでいくと、2章7節に「主なる神は、土（アダム）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」とあります。そのアダムは「人」であり、まだ「男」とは表記されていません。彼は非常に賢くて、見るもの、聞くものに次から次へと名前を与える働きを示し、神も自分の作品に満足しています。しかし、どうしても彼が完全に幸せであるようには見えません。そこで「主なる神は言われた。『人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。』（2章18節）。そして、アダムを深い眠りに落とし、寝ている彼の肋骨を一本取っ

て、肋骨からエヴァをお造りになった、とあります。それが、「創世記」にあるふたつ目の「女性の創造」物語です。

次の図2は、14世紀の画家、マイスター・ベルトラム作のグラボウアー祭壇の一部ですが、アダムのわき腹から誕生するエヴァが描かれています。カトリックや



図2 マイスター・ベルトラム作「エヴァの創造」(ハンブルク・聖ペトロ教会「グラボウアー祭壇画」 1379-1383より)

東方教会の伝統では神のイメージはヒゲのある男性で表されます。右端は深い眠りに落ちている人祖アダムです。そのアダムの右わき腹からエヴァが誕生しています。可愛いエヴァですね。仏教の創唱者シッダルタ王子もマヤ夫人の右わき腹から誕生したという説話もこうした貴種誕生譚のパターンに属するものでしょう。

ではなぜ「創世記」中に、二回も人類創造が語られるのでしょうか？ 実は、ひとつ目の1章にある創造物語は、「祭司資料」(P資料・紀元前470年ごろ)に基づくもので、ふたつ目の物語の方は紀元前10世紀にさかのぼるとされる「ヤーヴィスト資料」(J資料)という最も古い伝承に由来するのです。古い伝統であり、創造の経緯がドラマチックなので、この物語のほうが独り歩きし、知名度が高くなりました。エヴァの出自が問題になるときは、男女同時の創造が語られる1章ではなく、2章の「男の肋骨から造られたエヴァ」の方がポピュラーなのです。教会伝統も2章の物語を重要視し、エヴァは男の肋骨から造られたので、二番手の人間存在である、という評価さえ普及してしまったの

です。新約聖書のパウロの言葉の中に如実にその影響が表出していきます。「女性性は男性から派生した存在で、助け手として造られただけですよ」*というのが、中世から20世紀までの教会における女性イメージになってきました。これが今日問題になっているのです。

*「女は男の栄光を映す者です。というのは、男が女から出て来たのではなく、女が男から出て来たのだし、男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです」(「コリントの信徒への手紙1」11章7-9節)、「婦人は、静かに、全く従順に学ぶべきです。婦人が教えたり、男の上に立つたりするのを、わたしは許しません。むしろ、静かにしているべきです。なぜならば、アダムが最初に造られ、それからエバが造られたからです」(「テモテへの手紙1」2章11-13節)など。

2章の解釈には、さらなる問題があります。これは、ヘブライ語の研究者たちが20世紀に発見したことです。が、2章で、神は「アダムが独りでいるのはよくない。彼にふさわしい助け手を造ろう」と語ります。この「助け手」という言葉は「ヘルパー」など助手のような意味で翻訳もされ、そのように理解されてきました。こ

れは、ヘブライ語からギリシア語・ラテン語に訳されたときに、既にそのような意味に定着したようです。ところが、20世紀の旧約聖書学の研究によると、「助け手」というのは、決して助手のような補助役を意味するのではなく、相手なくして自分自身も成り立たないという存在、同じ価値をもった「対等のパートナー」という意味である、と立証されたのです。「助け手」の原語はエーゼルというヘブライ語で、本来は、「神が人間の助け手となる」というように、神自身にも用いられる表現だからなのです。こうした発見、解釈は女性の存在意義確立のために、重要な意味をもつことになりました。

このようなフェミニスト神学の研究成果も踏まえながら、20世紀、21世紀のキリスト教会は、女性が男性から派生した二次的存在ではなく、創世記1章に語られるように、創造の当初から「男と女」として人類を形成する対等な存在であること、またそれを神が望まれたということを認めています。「創世記」に人類創造物語がふたつあることの謎は、以下の解釈で一件落着

しています。すなわち古い伝承（2章）の人類創造物語を、500年後にその本来の意味を確認するために、新たな表現で語り直したのが創世記の冒頭（1章27節）の物語、男女同時の創造である、という解釈です。

ところが、ユダヤ人の世界においても、またその後の初期キリスト教においても、2章の「アダムのお骨からエヴァが誕生した」という物語を基礎に、二次的に派生した存在が女性であるというマイナスイメージが主流になります。女性の肉体的な弱さが精神的な弱さとして翻訳されるのです。こうしたイメージが、古代ギリシア・ローマ的な世界観によって増幅され、女性観がさらに負の方向に歪曲されていくのです。

失樂園の物語は何を意味する？

アダムとエヴァの成長物語！

エヴァとアダムはエデンの園で平穏に暮らしていましたが、やがて知恵の木の実を口にします。図像史的には「リンゴ」とされていますが、「創世記」には「善悪を知る知識の木」と書いてあるだけで、リンゴと表

現されているわけではありません。なぜリンゴとされたのでしょうか。古代ローマのラテン語では、「悪(malum)」を意味する語と「リンゴ(malum)」の語が似ているところから、ヨーロッパではいつしか知恵の実が「リンゴ」ということになったようです。

この知恵の実を食べることは、二人にはタブーとさ
れていました。二人は忠実にそれを守っていたのです
が、あるとき、園の蛇との会話で、「あれを食べたら神
のように善悪を知るようになるのです」と唆され、エ
ヴァがそれを食べたところ、とても美味しかったので
す。さつそく愛するアダムにも与えたところ、アダム
も口にしました。すると、「自分たちが裸であることに
気づいた」と記されていますね。神の近づく足音が聞
こえたとき、裸であることに恥ずかしさを覚え、思わ
ず身を隠します。それで神は、彼らが何をしたかに気
づくというわけです。

長いことキリスト教会は、人祖がこうしてタブーを
侵し、罪を犯したせいで、罰を受け、エデンの園を追
われた、と理解してきました。そしてそれが人類の原

罪である、と考えられたのです。

ところが、20世紀、21世紀の神学者は、もうひとつ別の解釈を提示することになりました。伝統的解釈に従うなら、旧約聖書の物語に矛盾が生ずるからです。女性が夫に支配され、陣痛をもって出産する運命を担うとされる一方、男に向けて発せられた神の言葉は、こうです。「お前は顔に汗を流してパンを得る、土に帰るときまで。お前がそこから取られた土に」（創世記3章19節）。これを同様に神の罰と解するなら、死の運命を負うのは、男性のみという矛盾に突き当たります。では現代の解釈はどうなのでしょう？ 食べた木の実のせいで、知恵がつき、裸であることに気づいた、という記述は、エヴァとアダムが大人に成長し、独立の時機に達したからである、と読み解くのです。神は知恵を得た二人を見て、「これからは自分の力で額に汗し、労働を担うことで、自分たちの世界を拓いていきなさい」というメッセージを送り、二人を園から出したというわけです。実際、ヨーロッパやアメリカの家庭では18歳・19歳になると「自立の時機」と称して、親の

家を離れるのが常識です。現代は諸般の事情から、もう少し長く親元に留まるケースが増えてはいるようですが。エヴァとアダムは、自立の機が熟し、親の家であるエデンの園を出されたという解釈が定着しつつあります。そうした解釈の正当性を感じさせるのが、エデンを去る際に、「神が二人に皮の衣（ヒツツモノ）を着せた」という記述に見られるような親としての配慮です。神が二人の子孫の繁栄を祝福しているのも確かです。

「誘惑者としての女性と蛇」のイメージ

エヴァは、ユダヤ人のイメージからすれば、おしゃれで、おしゃべりで、魅力的で男性を虜（とりこ）にする誘惑的存在とされますが、それ以上に悪いイメージはありません。しかし禁欲的傾向を有したキリスト教会は、このエヴァのイメージから、セクシユアルな誘惑者という後の魔女の原型に近い悪女像を抽出していくのです。

これ（図3）は有名なミケランジェロの作品で、ご存じの方が多いと思います。誘惑されるエヴァとアダムです。ここでは蛇は樹に巻きついた姿で描かれ、エ

ヴァと蛇の関係が親密であることが見て取れます。ユ



図3 ミケランジェロ作「墮罪」(「アダムとエヴァの原罪とエデンの園からの追放」部分)(「パチカン・システイーナ礼拝堂天井画」1508-1512より)

ダヤ人の伝承であり、またキリスト教圏に継承された民間伝承には、リングゴを食べた後、実はエヴァと蛇は結婚した、二人の間に最初に生まれたのが人類最初の殺人者カインだったというものがあります。当然ながら教会は認めていない伝承ですが、エヴァの役割をセクシユアルな方向に発展させたという流れがあることを知っておく必要があります。別の民間伝承では、蛇も誘惑者として女性化して描かれることがあります。ミケランジェロの絵でも、蛇は女性として描かれています。ルネッサンス期からエデンの園の蛇を女性として描く例が増えてきます。

「アダムの最初の妻」リリス

ジョン・コリア(1850-1934)というイギリスの画家に「リリス」という作品があります(図4)。リリスはオリエント地域で知られた魔女、妖精ですが、この絵では身体全体に蛇が巻きついていきます。女性と蛇というのは、多くの神話で非常に親密な関係に描かれますが、旧約聖書の「誘惑されるエヴァ」の話に関



図4 ジョン・コリア作「リリス」
(1892年、イギリス・サウスポートのア
トキンソン・アート・ギャラリー所蔵)

連して、ユダヤ教、そして初期キリスト教の世界には、魔女リリスこそがアダムの「最初の妻」だったという民間伝承がありました。

先ほどお話ししましたように、旧約聖書では、女性の創造譚が二回、語られています。創世記第1章では、女性が男性と同時に創造されています。そのせいで女性性は、男女平等、同権の意識が高く、アダムの言うことに従順ではない、とイメージされたのでしょう。現代風に言えば、『「コーヒーを入れて!」って、とんで

もない! 自分で入れたらいいでしょ!」式に、同権を声高に主張する女性でしょうか。民間伝承ではその女性とリリスが同一視されたようです。リリスは、要求の多いアダムに業を煮やして、ついにエデンを飛び出してしまったというのです。その後リリスは、神の名を呪いつつ、自由に世界を往来し、男性の夢枕に現れては、誘惑し、夢精させてしまうという魔女にされていきます。夢精は、ユダヤ人男性にとっては大きな罪に値するケガレとされ、贖罪の対象でしたから、リリスはユダヤ教正統派の敵ということになるのです。リリスは本来、古代バビロニア、メソポタミア文明圏では、恐れられもし、人気もあった妖精的存在でしたが、民間伝承が拡大していくうちに文化の習合がなされ、やがて「創世記」1章に登場する女性と同一視されていったと思われます。

そして「創世記」2章に新たな解釈が追加されます。妻に去られ、落ち込んでいるアダムを神が憐れみ、彼の肋骨から従順な女性エヴァを創造した、というのがキリスト教文化圏で好まれる民間伝承になりました。

リリースは、アメリカのフェミニズムによって、自意識に目覚めた女性の原型として再発見され、「リリースの再来！」をスローガンに掲げるフェミニスト神学者のグループもあるほどです。

いずれにしても人祖の一人エヴァのイメージから、徐々に女は誘惑者で危険な存在、すなわち規範の破壊者、官能性の表象として、「感覚的で知性・精神性に乏しい」というイメージにまで拡大解釈されていきます。

3 「新約聖書」——脱神話化される女性たち

次に、「新約聖書」に登場する女性たちを考察しましょう。仏教の女性像で初めに登場するのは、お釈迦様のお母様であるマヤ（摩耶）夫人です。彼女の懐胎・出産のイメージは、どこかマリアと似ているかもしれませんが、役割は少々違います。また、「マヤ」(Maya)という名前には、現実の存在ではない「幻影」という意味があるそうですね。聖化されたマリアには天の女王として、またマヤ夫人にも天上界に安らう天女として、後の伝統は、似たようなステイタスを与えています。

す。また貴種誕生の奇跡が語られる点で、産んだ子のゆえに栄光を与えられる存在となっています。

創唱者と女性との関わりというテーマをさらに考える時、仏教における勝鬘夫人しょうまんの活躍や「長老尼偈」に結晶している女性たちの悟りへの能力、悦び、ブツダへの深い帰依心の表現を思い起こします。仏教でもキリスト教でも、初期教団においては、創唱者の教えに共感し、協働し、自らも救いの道で真摯に活動した女弟子たちの様子が浮かび上がってきます。女性の重要な活動の記録も歴史に残されているのです。男女平等という革新的原点は、二人の創唱者に共通であったことは想像に難くありませんが、教団の組織化、拡大化のプロセスで、個々の社会の家父長制の価値体系が滑り込み、女性は男性の背後に退いていく、という点では、これまた宗教史に典型的な運命と思われます。ここでは、新約聖書にある女性の足跡を改めてたどってみましょう。

現代でもキリスト者にとって、イエス・キリストは神の子として教会の三位一体教義の重要な一角をなし

ています。「聖書」はその成り立ちからして、当然ですが多くの神話的な表現に満ち満ちています。そこで実際に、20世紀、21世紀の神学は、聖書の本来のメッセージを今日的理解にふさわしい形にするために、神話的表現から神話の衣を剥ぐ作業、つまり脱神話化した解釈を通し、キリスト教の本質を可視化する努力をしています。イエス・キリストは十字架上で亡くなりますが、三日後の復活により、キリスト、すなわち救い主として「神の子キリスト」という課題を完成し、キリスト者に永遠への希望を灯したと考えられています。復活の神学については、これ以上言及するゆとりがありませんが、今日は、イエスと関わった女性たちの物語をいくつか脱神話化の解釈を通してご紹介しましょう。次の女性たちとの出会いは、イエスが神の子としての使命に新たに目覚める転機ともなっているのです。ペトロ、ヤコブといった男性弟子たちも、宣教に重要な役割を担っているのは確かなことです。しかし新約聖書がはしよることなく伝えている一連の女性の行動も、イエスがキリストとしての業^{わざ}を完遂するた

めの折々の節目に決定的な働きをみせています。

「聖書に見る女性の実像」の例として、男性の弟子も及ばないほど自由な発想、自由な行動をする女性たちを取り上げましょう。正統派ユダヤ教を信奉する人々に迫害され、気弱になるイエスに勇気を与え、その救済の業に協力したのがこれらの女性たちであり、彼女たちの革新性、賢明さ、優しさ、勇気と自律性が表出しています。

① 母マリア

その典型的な例が、ローマ・カトリック教会および東方教会により聖母として崇敬の対象とされるイエスの産みの母マリアです。カトリック教会は、紀元5世紀に（431年のエフェソス公会議）、マリアが人間でありながら神の子を産んだ女性であるとして「神の母（テオトコス）」というステイタスを公認しました。その後、彼女はイエスを出産したにもかかわらず、ずっと処女であり続けた、という「永遠の処女性」という一見奇妙な教義が補足されました。ヘレニズム文化の影響と

思われます。

ギリシア神話では、ゼウスの妻であるヘラという女神も、ヘラ神賛歌のなかで「処女神」と讃えられています。ギリシアの世界で処女という表象は、フィジカルな意味ではなく、既婚か否かに関係なく、男性に依存せず、自律して、崇敬の対象となる女神に対して贈られる尊称なのです。カトリック教会の教義にある「聖母であり、永遠の処女」というマリアの表象は、ヘレニズム世界からの影響と考えれば、それほど不思議ではないのです。

カトリック教会では、聖母マリアが神に従順で、時代に先駆けた強い信仰を証したため、すべての信徒の模範とされています。その例証が、天使による受胎告知に対し、(世間的には)父なし子を産む不条理な現実を敢えて引き受ける、という強い勇氣と神への信頼のなかで神を受容した個所です(ルカ福音書1章26―38節)。その後、母としてイエスへの信頼・信仰が凝縮している場面が描かれます。新約聖書(ヨハネ福音書2章1―11節)の「カナの婚宴」での出来事です。イエスが活動を

始めて間もないころです。図5は、イタリア・パドヴァのスクロヴェーニ・アレーナ・チャペルの有名な壁画



図5 ジョットー作「カナの婚宴」(1305年頃完成の「スクロヴェーニ・アレーナ・チャペル壁画」より)

画で、ジョットー（1267頃－1337）の作品です。ここで、マリアの親戚だったのでしょう、ある婚礼の宴が描かれています。マリアとイエスそしてイエスの弟子が招かれています。正面右の光輪つきの女性がマリアです。花婿・花嫁が中心に座り、イエスは図の左端に位置します。宴の途中で、マリアがイエスに「葡萄酒がなくなりました」と言います。

何とかしてあげてくださいとイエスに頼んだのです。しかし、イエスはそっけなく「婦人よ、私とどんなかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません」と、母の頼みを退けます。でも本当にワインが足りなくなっています。当時のユダヤ人社会で、人を招きながら飲物・食物を十分供給できないことは、最大の恥辱でした。そこへイエスが奇跡を起こします。家の使用人に、置いてあった石の水がめ6個を「水で満たしなさい」と命じたところ、その水が質の良い葡萄酒に変わったのです。イエスが起こした最初の奇跡とされています。

奇跡の話を眉唾とお思いにらずに、脱神話化して、

彼が行ったあの当時の人々にとつての素晴らしい出来事として理解し直す必要があると思います。ここでのマリアの役割は、どうでしょうか。どんな危機にあっても、イエスが神の意思に従い、良き力を發揮すること信じ、時の熟するのを待つことができた最初の、そして最も忠実な信徒であったということです。カトリック教会の描く母マリアのイメージのひとつです。

② 香油を塗る女

次に、「香油を塗る女」を見ましょう。「ベタニアのマリア」とも呼ばれていますが（ヨハネ福音書12章1－8節）、聖書の別の箇所（ルカ福音書7章36－50節／マルコ福音書14章3－9節）では罪深い女、無名の女として登場します。イエスがある家で食事の席に着いているところに、非常に高価な香油を持ってイエスに近づき、涙でイエスの足を濡らし、髪でぬぐい、その足に香油を塗った女性です（マルコ福音書では「イエスの頭に香油を注いだ」）。

イエスはこのときエルサレムにいて、彼の最期のと

き、つまり十字架上の受難という自分の使命の悲劇的な完成を予期していました。その時機に、名もない一女性が芳しい香油でイエスに塗油した、という有名なエピソードです。「こんなことをするよりも、この高価な香油代を貧しい人に寄付すべきなのに！」と、彼女の行為をなじる弟子もいましたが、イエスはそれを押しとどめ、次のような言葉で彼女の行為を正当化します。「あなたは足を洗う水もくれなかったが、この人は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれた」（ルカ福音書）、「この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた」（マルコ福音書）。イエスはそう言って、「彼女のしたことは、私の死後も永遠に、世界中で語り継がれ、記念されるであろう」という不思議な予言を残します。これは、現在のカトリック教会でも、この女性の行為が、イエスの来るべき受難の準備をしたという意味で、重要な役割を果たしたと考えられています。

③ サマリアの女

この絵（図6）は、有名なエピソードの「サマリア



図6 アンゲリカ・カウフマン作「井戸端のサマリアの女とキリスト」（1796年、ミュンヘン「ノイエ・ピナコテーク」美術館所蔵）

の女」を描いたものです。作者は、アンゲリカ・カウフマン（1741－1807年）という18世紀ドイツの女性です。当時では珍しい女性画家でした。日本では平安時代から鎌倉時代にかけて女性たちが多彩な文学作品を著し、女性の才能が開花しました。日本女性の華やかな芸術活動とは対照的に、ヨーロッパではキリスト教会の圧力のせいで、女性が表だった活躍をするとは極めて稀でした。新訳聖書中のパウロの言葉として「女は教会では語ってはいけません」「わからないことがあったら夫に聞きなさい」「なにごとく夫に従いなさい」という趣旨のことが記述されています*。

* 「婦人たちは、教会では黙っていなさい。婦人たちが語ることが許されていません……何か知りたいことがあったら、家で自分の夫に聞きなさい」（コリントの信徒への手紙1」14章34－35節）、「妻たちよ、主に仕えるように、自分の夫に仕えなさい」（エフェソの信徒への手紙」5章22節）など。

このメッセージはイエス自身の言葉ではありませんが、こういう女性観が底流にあるせいで、神学・哲学の歴史には女性が登場しなかったのです。現実にはそ

れだけの能力を発揮した女性も存在したのですが、当時はあつてはならないこととして、隠されたままでした。近代後に続々と中世における女性の発言記録、論考の類が発見されています。当時のキリスト教史を繙^{ひもと}いても女性の名前が見当たらないのは、女性が独立して、表立った活動することが許されなかったからです。ですから、女性の詩人や著述家が世に出にくく、女性が作品を発表するには男性の名前を使わざるをえないという状況が19世紀まで続きます。このアンゲリカ・カウフマンは例外の一人で、18世紀に活躍した画家ですが、そのあり余る才能を誰も隠すことができず、こうして作品が残っています。

この「サマリアの女」も、聖書の大事なエピソードです（ヨハネ福音書4章1－42節）。イエスがガラヤヤへ向かう途中、サマリアを通ることになります。サマリアはユダヤ人に敵対していた土地で、イエスにとって安全ではない場所でした。イエスが正午頃にサマリアに着いて、井戸のそばに座っているころ、人目を忍ぶようにサマリア人の女性が水を汲みに来ました。イエ

スは、この異邦人の女性に「水を飲ませてほしい」と頼みますが、女性には「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と訝ります。するとイエスは、自分が与えられるのは永遠に渴くことのない水であると言って、代わりに女の汲んだ水を所望するのです。そしていくつかの問いと応答を交わした後に、イエスは「あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない」と、彼女の不遇な日常を見抜いてしまいます。女は雷に打たれたように、イエスの崇高さに感じ入り、イエスの告げる神への信仰に目覚めるのです。それは多分、イエスの伝える神への信仰を獲得すれば、彼女が、男性に従属することなく、自身の力で生き抜くことができる、というメッセージであつたのでしょう。

このサマリアの女性は、イエスが語る「永遠のいのちに至る水」の意味を理解し、イエスが救世主であることを悟つたのです。女は自分の水がめをそこに放り出し、サマリアの町に戻り、救世主に会つたこと、自分の境遇を言い当てたことを告げたのです。町の人々

はイエスの話を聞き、イエスを信じたのです。こうしてこの女性は、異邦人の地でのイエスの教えの最初の宣教者になりました。

④ カナンの女

イエスが、別の異邦人の町に行かれたとき、一人のカナン人の女性が来て、「悪霊に取りつかれた自分の娘を救ってほしい」と頼みます。ところがイエスは、自分はいスラエルの民を救うために遣わされた、と述べた後、「子どもたちのパンを取って子犬にやつてはいけない」と、異邦人である彼女の頼みを断ります。しかし彼女はあきらめません。娘を救えるのはイエスしかない」と全幅の信頼を寄せるのです。イエスの前にひれ伏し「子犬も主人の食卓から落ちるパン屑をいただくのです」。ついにイエスも「あなたの信仰は立派だ」と彼女を讃え、娘の病気を癒すのです（マタイ福音書15章21-28節／マルコ福音書7章24-30節。図7参照）。

この名もない異邦人の女性の勇気ある行為は、自国民にしか関心を向けていなかったイエスを、普遍的救



図7 ジャン・ジェルマン・ドルーエ作「キリストにひざまづくカナンの女」(1784年頃、ルーブル美術館所蔵)

済という使命に目覚めさせる画期的な契機をつくったと言えるでしょう。

⑤ 姦淫の女性

「姦淫した女性」のエピソードは、キリスト教圏を超えてよく知られています(ヨハネ福音書8章3・11節)。律法学者やファリサイ派の人々などイエスに敵対していた人々が、姦淫の現場で捕らえられた女性をイエスのもとに連れて来ました。こういう女性は当時の律法では石打ちの刑で殺されることになっていました。彼らは、イエスがこの刑に同意しなければ律法違反である、と非難し、告発するつもりだったのです。イエスは画期的な言葉を放ちます。

「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げなさい」と。罪を犯したことがないと自負できる人間がいれば、律法通り石投げの罰を与えなさい、ということです。イエスを試そうと息巻いていた男たちも、そう言われると、人間誰しも、脛すねに傷をもつ身です。一人去り、二人去り、誰もいなくなっ

てしまいました。イエスは件の女性に、「これからはもう罪を犯してはならない」と語り、女性を解放したという物語です。

「姦淫するなかれ」などモーセが神から与えられたという律法をどのように捉えるか。イエスにあつては、誰しも何らかの過ちを犯す、有限で弱い存在が人間であるという確信が前提となっています。従つて、人の罪に向き合う際、律法を教条的に判断し、たてまえで裁くのではなく、むしろその人が過ちを内面化し、より善い生活に向かう可能性を残すというイエスの基本姿勢が、このエピソードに結晶しています。

⑥ マグダラのマリア

最後に挙げるのはマグダラのマリアです。復活したイエスに最初に会ったのが、彼女です。イエスが埋葬されたお墓に行つてみると、中は空っぽになつていて、天使がいました。泣き続け、涙も涸れはてたマグダラのマリアが振り向くと、イエスが立っていました。しかし、涙で曇つた彼女の眼には、イエスがよく見えず、

庭師が来たと勘違いします。そして「あなたがあの方を運び去つたのだしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしがあの方を引き取ります」と、語りかけます。やがて、それがイエスだとわかり、イエスが生前のことば通りに復活したことを知り、弟子たちにそれを告げに行きます。このように、復活の最初の証人がマグダラのマリアだった、と福音書が語っています（ヨハネ福音書20章11節以下／マルコ福音書16章9－11節）。

このマグダラのマリアは、罪深い女性であつたが、イエスによつて聖女に生まれ変わった、と長いこと誤解されてきました。実際は、精神的な病で苦しんだようですが、イエスとの出会いを通して、イエスの教えを理解し、弟子のグループでも指導的な役割を担った女性だったことがはっきりしてきました。それにしても、マグダラのマリアが、復活の最初の証人というきわめて大切な役割を担った人物として、新約聖書が記述している事実は注目すべきです。イエスの言動には、明確な男女平等の原則が貫通しています。

4 歴史がつくりだした女性の虚像

さて、これら「聖書に現れた女性の実像」とは別に、教会伝統がつくり出した女性の虚像に言及したいと思っています。旧約聖書の素朴なエヴァ像から、キリスト教文化圏には二極に分裂した女性イメージが生まれ、定着します。

エヴァの末裔としての悪女・魔女

日本でも「女だてらに」政治世界に君臨した北条政子や日野富子のように、時の社会規範から外れた女性は、往々にして悪女のレッテルを貼られることがあります。身体的、社会構造上の弱さが精神的弱さへと読み替えられ、キリスト教文化圏では、魔女という虚像が成立します。ドイツ語の「ヘクセHexe」という魔女概念は、「ふたつの垣根にまたがる者」という語源をもっていることから、あの筈にまたがり自分のテリトリーの家庭という垣根を越えて、自在に空を飛びまわるイメージに発展し、ポピュラーになりました。魔女は、「エ

ヴァの末裔」として、悪に誘惑されやすい弱さと、男性を誘惑する官能性を備えた悪女の典型です。民間伝承では、性に奔放で、どこへでも自由に飛翔し、悪魔の催す乱痴気宴会に参加するというイメージで語られてきました。

中世から近代にかけて、教会の異端審問の一環として、不条理な魔女裁判も頻繁に行われました。魔女裁判では、どこに黒子があるかなど、「魔女のしるし」なるものが恣意的に見つけられ、世俗の権力者に悪用されれば、だれでも魔女にされてしまうわけです。実に多くの女性が魔女とされて処刑されました。ときに男性も魔女とされましたが、富裕な未亡人が多くターゲットにされたとも言われています。このように社会的につくられた魔女という女性の虚像も存在したのです。

エヴァの末裔としての良妻賢母

魔女像の対極には、神の母としてのマリアに収斂しゅうれんされた理想の虚像が描かれました。マリアはすでに初期キリスト教時代から、第二のエヴァと呼ばれていたの

です。天国の園に憩うマリアの図像がよく知られています。その「閉じられた園・庭」は、処女の象徴であり、そこに幼児を抱く姿で聖母が表されます。その姿は、カトリック教会における伝統的理想の女性像を表しています。このように良妻賢母が教会推奨の女性の生き方ですが、その上に当時の家父長社会の価値観が投影され、女性のステイタスは一段と低く位置づけられることになります。

「新約聖書」のパウロの書簡において、すでに《神―キリスト―男―女》のように男性・女性のランク付けが宣言されます。「すべての男の頭は^{かしら}キリスト、女の頭は男、そしてキリストの頭は神である」（「コリントの信徒への手紙1」11章3節）。さらに中世の重要な神学者、聖トマス・アキナスが、「男は神の似像、女は男の似像」と語り、このランク付けを神学的にも正当化していくのです。使徒パウロの言葉で、「婦人たちには（人前で）語ることが許されていません」（「コリントの信徒への手紙1」14章34節）、「しかし婦人は、信仰と愛と清さを保ち続け、貞淑であるならば、子を産むことによつ

て救われます」（「テモテへの手紙1」2章15節）と説かれるように、女性の生き方が家庭内（妻・母として）または修道院（処女として）に限定されることになるのです。近現代まで、キリスト教文化圏の女性たちは、「愛」をもってこうしたステイタスを生きるように諭されてきたのです。いみじくも20世紀の神学者によって「愛の家父長制」という表現がつけられたほどです。

5 現代キリスト教文化圏での

男・女の生き方

19世紀、20世紀に種々の女性運動、女性学、フェミニスト神学、ジェンダー・スタディーズの台頭により、聖書の解釈の仕方と同時に「愛の家父長制」の現実が問い直されることになりました。こうした運動・思想の成果を踏まえて、女性も自分にふさわしい生き方を選べる時代が徐々に実現してきました。他方、初期の女性運動が女権拡張を訴え、強調したことで、男性を敵に回しただけでなく、女性の間に種々の分断を引き起こした負の側面があることも否定できません。グロ―

バリズムの渦中で、産業資本国の女性が、途上国の女性を間接的にせよ、搾取することになった事実が明らかになったからです。さらに同性愛、両性具有、トランスジェンダーの人々、また被差別グループのようなマイノリティに対する偏見を見据えて、ポストモダンを標榜するフェミニスト神学は、大いなる反省をこめて、社会構造的弱者の解放をメッセージすることになりました。

男女平等の救済を証する神の似像性

聖書テクストの成立に関する歴史的研究や、当時の社会状況の研究が進んだいま、聖書の解釈にも種々の点で改正が試みられるようになりました。女性が「第二の性」(シモーヌ・ド・ボーヴォワール)と位置付けられた根拠、すなわち女性が男性から派生した二流の存在と解釈された聖書の個所や、女性が男性の似像(トマス・アキナス)にすぎないという思想に、新たな解釈が施され、男女平等の救済がゆるぎないものになりました。創造における平等性の確認は、女性も同様に直

接的に神の似像であり、いかなるステイタスであれ、男性と同様の人権と人間の尊厳を女性に認める結果となりました。こうした確認が国連の人権宣言に結晶しているのです。

イエスのメッセージにある明確な男女平等観も、女性の生き方における自由を保障するものとして再確認されています。またパウロの画期的な平等観もフェミニスト神学によって再発見され、女性にも、マイノリティの人々にも勇気を与えています。キリストへの信仰において、「もはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分もなく、男も女もありません」(ガラテヤの信徒への手紙「3章28節」)が、キーワードとなっています。

女性の能力が開花するために

① 謙譲のトボス(定型表現)は男女に共通という認識
謙遜の徳は、特に女性に要請されてきました。男性は世界、社会の形成に力を発揮することが期待されたために、謙遜は必ずしも男性の徳とはされませんでした

た。常に女性に要請されてきた謙讓の定型表現、たとえば、「教養なき身でありながら……」あるいは「女性の身で恥ずかしながら……発言します」などという定型表現から、女性はまずは自由になる必要があります。もつとも現代ではすでにこうしたトポスは死語になっている、とも思われます。女性は、いまや自己の発言行動に責任を担えるよう、自己意識を高めなくてはならないからです。過去の歴史においては、女性を含めて権力をもたない存在は、往々にして社会的責任を免れてきましたが、権利の取得は同時に責任と義務の履行を伴うことが要請されるからです。

すべての職業が、原則として女性にも男性にも開かれるようになりました。かつては、政治家、弁護士、教授職、医師、教会の諸職など（カトリックの司祭職を除いて）は、男性専科の職業でしたが、女性も自己の能力、関心にふさわしく、自己実現の道を拓くことができる時代が始まりました。

② 自立と自己決定する勇氣と知恵

権利と責任の自覚をもつことで、女性も「社会の良

心」としての生き方が期待されます。母親が自立していないと、娘にも同じようなジェンダー観を植え付けます。母親には子どもの永遠の乳母になりさがらない自立性の確保が要請されています。娘は母から自己信頼と自己感情を受け取るので、母が無批判に過去の因習を内面化している場合、娘を解放できないというリスクを負うのです。自己決定といっても、人間の生活は種々の関係というコンテクストから切り離せません。こうした日常の関係性と自己決定の間にある距離の測り方が難問となっています。キリスト教会では、コンサルティングのシステムがうまく機能しているケースがあります。

③ 「女だから仕方ない！」という発想をやめる

女性の学業や職業生活において、周囲は男性に対するのと等しい対応をする必要があります。そうした環境で女性の自立心、責任感が成熟するはずです。

④ 「隠れた存在であれ！」の宗教メッセージの意味を

正しく！

これは、キリスト教世界では重要なメッセージなの

ですが、女性にとつては、とりわけ微妙な高さをもつハードルになっていました。公の場での発言・活動が、長いこと女性にはタブーとされていたからです。イエスの語るメッセージは、「善いことをするときには、右手のすることを左手にも知らせるな」というほど、ラディカルです。しかし「隠れた存在」であることで責任を取らない生き方も、また逆に、人間関係や社会ルールを一方的に無視する独立独歩の生き方や、人を押しつけるのけながらの自由の謳歌も、イエスの精神ではありません。

⑤ イエスのメッセージに従うなら、女性・男性はどう生きればよいのか？

「マタイによる福音書」(25章35-36節)に「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ」とあります。

成熟した人間には、自立心、責任の自覚は当然の前提ではありますが、キリスト教で特に大切にされてい

るのは、上記のような関係性です。神格であってもやはり、三位一体(父・子・聖霊)という関係性で理解されているように、人間存在も関係のなかで捉えられています。神と人間、世界と人間、人間と人間、人間と自然環境というように、人間はあらゆる存在との関係のなかに生きていることを自覚することがメッセージされています。

⑥ 精神的母性の発揮

キリスト教会には、精神的母性という表現のもとで、「いのちを育む」という業を大切にする伝統があります。子どもや病を抱える人々、社会構造上の弱者と連帯すること、男性も女性も「いのちを育む」という役割を担っています。これは現代社会の病理をもつくり出した業績主義とは異なる価値体系の開示でもあります。教会は、本来異なる人々が集い、「家族」を味わう場でもあります。21世紀の今日、異文化の人、異国人など、多様な人々が共存する時代ですが、「家族」を味わう教会は、精神的母性を発揮して、様々な「違い」を楽しめる場でありたい、というのが今日の教会の意味です。

こうして教会の思想と伝統を、女性の視点から問い直すことで、形而上的メッセージと生活の視座が結びつき、現実の男性も女性も、他者を丸ごと認め、他者の人格形成に手を貸せるような成熟した社会の青写真が形成されつつある、と希望をもっているところです。

質疑応答

【質問者A】旧約聖書では、エステル（ペルシャ王の后となったユダヤ人女性。「エステル記」の主人公）はじめ、男性以上に活躍する女性が描かれています。教会で、これを受け継いで強調するようなことがあったのでしょうか。

【講師】たしかに、旧約には女傑ともいべき女性が登場します。しかし、カトリックや東方教会では、彼女たちをクローズアップしていいのではないかと思えます。良妻賢母の枠に収まらないからです。さらに彼女たちの行為に、敵を処刑するなど残酷な面があったことも否めません。彼女たちに注目したのは20世紀のフェミニニストでした。男性以上に力を発揮した存在と

して英雄視し、その価値を再発見したと思います。

【質問者B】女性ならではの権利というか、女性の生理的条件に伴う休暇など、女性だけの権利というものを教会が語ったことがあるでしょうか。

【講師】おそらく20世紀まで考えられていなかったと思います。古代には、戦争に随行して、戦場で出産した女性もいたという話もありますし、女性特有の権利を強調するという伝統は、比較的新しいと思われます。

むしろ、家父長制社会の中で、女性は男性より下位にあるものとされてきました。先ほども述べたように、パウロの言葉に「すべての男の頭はキリスト、女の頭は男、そしてキリストの頭は神である」（「コリントの信徒への手紙1」11章3節）とあり、教会の考える秩序として「神ーキリストー男ー女」という位階が意識されていました。神学者トマス・アクィナスは「男は神の真の似像だが、女は男の似像にすぎない」と考えました。こういう教会の思想というのは、冒頭に申し上げた通り、日本人が想像する以上に実生活に大きな影響を与

えています。

私がドイツで学んでいた60年代、70年代には、知人のお母さん、お祖母さんの世代が、どんなに不自由な待遇を強いられたかという話をよく聞きました。(1918年まで)選挙権もなかったし、大学に進学できる女性はいたとしても例外的存在でした。神の直接的似像ではないので、基本的に男性ほどの知性はないと決めつけられていたのです。

ちなみに、女性の社会進出促進のために、議員や公的機関の委員などに女性を優先的に割り当てる「クォータ制」がありますが、国によって取り組みに差があります。熱心に推進する国もあれば、「真に能力ある人の活躍をはばんでしまう」という理由で、あまり熱心ではない国もあります。

【質問者C】「エデン追放」について、罪を犯したからというのではなく、二人が成長し自立する時機になったからという解釈があることを教えていただき、強い印象を受けました。蛇についても、宗教学から見れば、

蛇が象徴するものは豊かであり、不死、死と再生、知恵その他、多様なシンボリズムがあります。女性にしても、神の創造によって人間が生まれた、その創出力とか産出力を象徴するのが女性だと考える神話はたくさんあります。旧約の世界は本来、そういう他の神話ともつながる豊饒さをもっていると思います。それを後世のロゴス一辺倒で貧しいものにしてしまったのではないか。たとえばフェミニズムの中に、そういう本来の旧約的世界の豊かさを思い出していこうという流れはあるのでしょうか。

【講師】旧約世界の豊かさというのは、まったくその通りだと思います。それなのに、「産み出す」という点でも、ソクラテスの産婆術のように「知を産み出す」のは男性だけの特権のように扱われ、女性はただ子どもを産み出せばいいというように貶められ、狭い領域に閉じ込められてきたわけです。それに対抗して、エヴァ＝女性の創造的な力という等式をフェミニズムは再発見してきました。

蛇と女性の関係についても、もともと蛇は「知恵の

シンボル」でもあったわけですね。バビロニアにも、ギリシアにも、そういう伝統がありました。ですから、女性の属性を蛇と結びつけて考えるのであれば、「知恵」や「創造的知力」を象徴しているとも解釈できます。ところが、キリスト教文化圏では、長らく、知恵と女性が切り離されてきたのです。

【質問者D】キリスト教文化圏での女性観がそのようなものでありながら、一方で、ドイツは現代の欧米では日本や他の文化圏よりも女性は社会で大きく活躍しているという現実があると思います。そのように変わった要因とかターニングポイントのようなものがあるのでしょうか。

【講師】たしかに、メルケル首相はじめドイツ女性の活躍は目覚ましいですね。女性の大学進学率も高いです。その一方で、ドイツでは、いわゆる専業主婦率も低いわけではないし、専業主婦願望も強いように思います。でも、彼女たちはたとえ家庭に閉じこもっているように見えても、何かのきっかけでその潜在能力を大いに

発揮し始めます。そういう社会的環境があります。大学の学費もずっと無料でしたので、教養層の幅が広いのかもしれませんが。市民活動で発揮する女性の創造的力は大きなものです。

私の実感としては、いかなる人であれ平等に「人権」があり「尊厳」があるという意識が社会に根づいている気がします。女性であれ、障がいのある人であれ、どんな人でも、同じ人権があり、尊厳がある——この意識が強い。こういう意識が、本人がやる気になった場合に、どんどん自分らしさを発揮していける社会的環境を支えているのではないかと思います。

（おかはるこ／清泉女子大学元学長）